

I 平城京羅城門跡を追って

平城京羅城門跡の存在に最初の手掛りがついたのは昭和10年の佐保川来生橋改修の時であった。西側川岸近くで川底から花崗岩質の礎石らしいものが発見され、当時の奈良県技師岸熊吉氏が見とけられたのはその年の五月であったらしい。3つの石が岸にそって橋から北20メートル程の間で発見され、その後10月に工事関係者によって、見取図が作られたようで、その資料が残っている。そしてその際北端の右の東へ3.5メートル程離れて今1つの石が新たに発見されたらしい。

見取図によると4つのうち最南端のものは形状も小さく、特に石そのもののスケッチがつけられている。それは長さ90センチ、幅65センチ、厚さ30センチで、表面の略中央に経10センチ、深さ10センチの円穴が図され、それにそって石の端まで幅10センチ、長さ15センチ、深さ10センチの柄穴が描かれている。その仕事から見て、扉の下を受ける唐居敷と察せられるが、扉軸をはめた円穴と方立（戸当り）の仕口とされる柄穴の関係位置が実測されていないし、この石が柱礎石にどのようにとりついていたか痕跡を追求したいがそれは他日の再検討を待つ他はない。

それとはもかくこの図から察して、羅城門の唐居敷として大きさも申分ない。他の3個も長方形である点から、常識的には礎石と直観できないが、大きさは長さ1.1メートル乃至1.2メートル、幅90センチ乃至1メートル、厚さ60センチ乃至90センチとあって、そのままこの門の礎石に用いて大きさから不都合はないし、昨年西隆寺東門跡で見出された礎石も長方形であったのであるから、その可能性は充分ある。しかしこれらの礎石の相互位置は乱れており、今回発見した土壇の現上面（表面はかなり削りとられている）よりも約2メートル下になるので、位置は動かされているものと認められる。

これらの礎石の発見により、この来生橋付近が羅城門の位置で、その遺跡の存在も予想さ

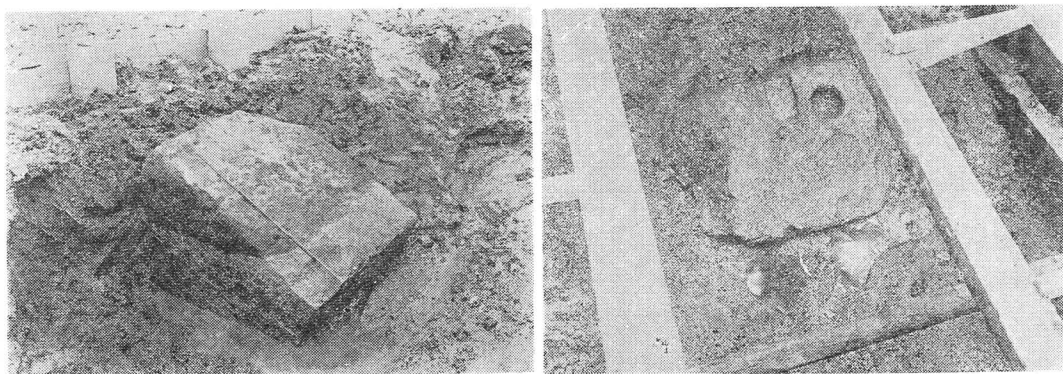


Fig. 1 昭和10年発見の礎石（岸俊男氏提供）

れ、解決の日が期待されてきたのであるが、それから3分の1世紀たった去る44年の夏7月から8月にかけて、佐保川の東側で奈良市によってその調査が計画され、故榎本亀次郎氏が中心となって発掘が進められた。不幸、川の氾濫で攪乱されていて、遺跡の追求は不可能であったが、川を挟んで東西の溝が川の西と同様、東でも南に迂回していて、門の廻りで敷地が掘げられていたことが認識された。こうして川の西側に期待が寄せられることとなり、翌45年の3月から4月にかけて、郡山市が主催して、奈良国立文化財研究所の協力により、第二次調査が行なわれた。その結果朱雀大路の西側と九条大路の北側の溝や築地跡や羅城外の濠の北岸が発見され、門の位置も的確に指摘できるに至ったが、その場所が金魚池になっていて、調査を他日に見送る他なかった。

その後ようやく機熟して、今年2月から3月にかけて第三次の発掘が行なわれ、遂に羅城

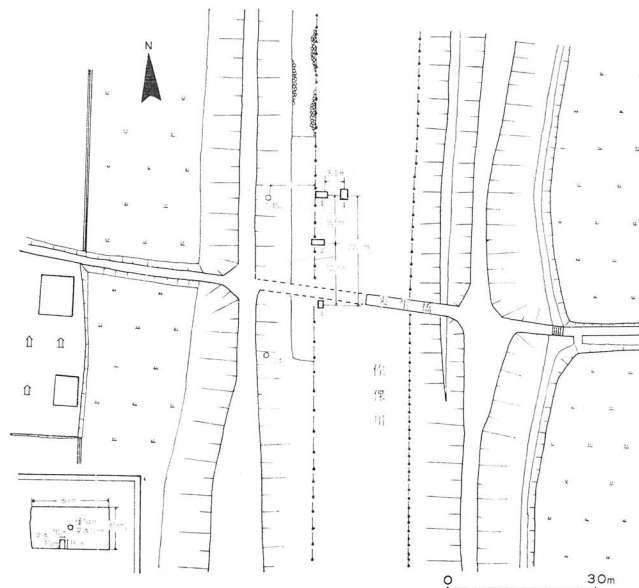


Fig. 2 昭和10年発見の礎石配置図 (岸俊男氏提供)

門基壇の西端と北端を確認し得た。そこには粘土や砂利混り粘土の互層からなる突き固め土壇が高さ約60センチ程残り、その少し外方に土壇を築くにあたって地山を掘り下げた境も見出されたので、疑う余地は全くない。

それではこの上にどれ位の大きさの門が建つかということになると、それを確かめるには礎石をぬき取った穴が発掘できると好都合である。今回の発掘ではそれを検討できなかったが現時点での発掘知見からすると、五間三戸の重層門が推定できる。平安京の羅城門は九間七戸とされてきているが、案外小さいことは予想外であった。それについてはなお朱雀大路の実際の幅を確認する必要もあり、羅城外の濠なども門の前でどのようになっていたか追求しなければならない。すでに門跡の存在は確実となったのであるから、次は一刻も早くその保存問題にもとり組んでいくべき時に到達しているのである。